

2025年6月8日聖霊降臨日説教

創世記11章1－9節

使徒言行録2章1－21節

ヨハネによる福音書14章8－17、《25－27》節

今日は聖霊降臨日です。新しい聖書日課では、使徒言行録2章を読むことは変わりませんが、旧約日課と福音書が変わりました。旧約日課は有名なバベルの塔のお話です。このお話は有名ですが、聖餐式聖書日課で用いられることはなかったと思います。このお話は、創世記の中でも1章から11章の一般的に原初史と呼ばれる神話的部分、ことにその最後に位置しています。それゆえ、原初史の他の部分と同じように、何が起きたのかを考えるというよりも、その意味は何かを考えることが大切です。有名な個所ですから、いろいろな解釈がありますが、ここでは人間的考えや思いで、「一つである」とは何かを考え、また目標とするとき、それが善意であれ悪意であれ、思いあがりや傲慢さにつながってしまうことへの警告にとらえたいと思います。ただし、『聖書』は、一つとなるということを悪としているわけではありません。原初史の始まり、エデンの園のお話においては、この箇所にある通り、一つの民と一つの言語で、よしとされていたからです。また、現代においても、一つとなるという概念は、様々な場面で高い価値を持ちます。しかし、一つであることを目指すとき、それを好まない意見が派生する場合があります。大切なのは、そのような事態において、どうするかということであり、その意味では、このお話は、そのような問いも含んでいるといえるでしょう。

さて、使徒書は、聖霊降臨日に必ず読まれる使徒言行録2章の箇所です。逆に言えば、復活日から40日目に昇天日、50日目に聖霊降臨日という時間的枠組みは、聖書的にはルカ福音書と使徒言行録、とくにこの2章からのみ引き出される事柄です。この箇所が読まれるのは当然といえます。ここにある聖霊降臨のお話も少し神話的であり、また奇跡のお話といってもよい内容です。その意味では、先のバベルの塔のお話と同じく、何が起きたのかについて考えることではなく、その意味について考えることが大切といえます。とはいいまでも、「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から起こり、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、他国の言葉で話しだした」（使徒2:2-4）という表現は、あまりに神話的であると同時に写實的であり、どのようなことが起こったのかが気になります。また、「どうして、それぞれが生まれ故郷の言葉を聞くのだろうか。私たちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、リビアのキレネ側の地方に住む者もいる。また、滞在中のローマ人、ユダヤ人や改宗者、クレタ人やアラビア人もいるのに、彼らが私たちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは」（使徒2:8-11）という極めて具体的な地名の羅列、そして最後の『あの人たちは新しいぶどう酒に酔っているのだ』と言って、嘲る者もいた」（使徒2:13）という現代的ともいえる覚めた反応は、実際何が起きたのかと読者の想

像を掻き立てるのも事実です。その意味では、今も存在する教会はどういう経緯で誕生したのか、それは復活されたイエス様が昇天された後、聖霊が降って誕生した。その根拠となるのが聖霊降臨日のこの出来事である、そうとらえることが最も大切ですが、その聖霊降臨自体の意味について、それぞれの時と場所において推測し、考えることも大切でしょう。

「すると、一同は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、他国の言葉で話しました」（使徒 2：4）とありますが、その場のすべての人が、一気に様々な言語を習得して話し出した、というのは理解しにくい事柄です。電子機器が発達した現代でも実現困難でしょう。また、人間の力ではできないが、「**霊が**」とある通り、聖霊の力ならできると解釈することも悪くはないのですが、今はその力があまり働いていないですといことが結論になりそうです。しかし、イエス様が天に昇った後、使徒たちをはじめとした、イエス様によって主なる神様を信じる人たちが、何かを天から受けたことを感じ、これから一緒に歩いていく喜びを伝えようとした。そして、その喜びを、自分の母国語や今知っている言語だけで伝えるのではなく、色々な言語で伝えようとした、そして、いろいろな地域から集まっていたからこそ、その喜びを伝えるために、一気に言葉の種類が広がった、そのように考えるならば、ここにある表現の意味は深いと思います。つまり、このお話において、大切なことは、話せる言葉が急に増えたことではなく、それが起こるほど喜びを伝える気持ちが強かったということです。そして、それが教会の誕生した理由であり、今も教会が存在する理由であるということです。教会は、いろいろな言葉で話したいと思うくらい、福音の喜びを伝えようとした人々の行動から始まった、そして、それは人間の発見・発明的行為ではなく、聖霊に導かれた事柄に他ならないということです。

本日の福音書箇所もその意味を補っています。「しかし、**弁護者、父が私の名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、私が話したことをことごとく思い起こさせてくださる。私は、平和をあなたがたに残し、私の平和を与える。私はこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。**」（ヨハネ 14：26-27）とあります。イエス様は、ここで弟子たちに対して、主なる神様をイエス様によって信じる時、そこには聖霊を通してすべてが明らかにされ、平和が与えられ、またそうであるがゆえに、世界にどのようなことがあって、心を騒がせる必要も、またおびえる必要もないと伝えています。ここは間接的ではありますが、三位一体を前提にした説明になっています。つまり、「父（なる神様）」が、「私（イエス）」の名によって、「**弁護者（聖霊）**」を通してと、三位一体が間接的に前提となっていることが重要なのです。一つといっても、統一された、あるいは他のすべてを排斥した一つではないのです。三つが一つなのです。むしろ、それでは一つではないではないか、といわれる一つなのです。しかし、だから、そこに平和があるのです。

世界のあちらこちらで今、平和ではありません。これからもっと様々な地域で平和ではなくなるかもしれません。しかし、わたしたちは、主なる神様をイエス様によって信じ、聖霊によって平和を与えられている教会の一つです。その歴史にも刻まれた聖霊降臨という出来事を基にした平和の歩みを、これからも続けたいと思います。